

富山湾（氷見市）で発見されたオサガメの記録

西尾正輝^{1),2)}・廣瀬直樹^{1),3)}・川上僚介^{1),2)}

¹⁾氷見市教育委員会 〒935-8686 氷見市鞍川1060

²⁾ひみラボ水族館 〒935-0113 氷見市惣領1927

³⁾氷見市立博物館 〒935-0016 氷見市本町4-9

A leatherback turtle (*Dermochelys coriacea*) in the Toyama Bay, Himi City, central Japan

Masaki Nishi^{1),2)}, Naoki Hirose^{1),3)} and Ryosuke Kawakami^{1),2)}

¹⁾Board of Education in Himi City, 1060 Kurakawa, Himi, Toyama 935-8686, Japan

²⁾Himi-lab Aquarium, 1927 Soryo, Himi, Toyama 935-0113, Japan

³⁾Himi City Museum, 4-9 Honmachi, Himi, Toyama 935-0016, Japan

はじめに

オサガメ科オサガメ属に属するオサガメは、太平洋、インド洋および大西洋に生息し、甲長200 cmを越すこともあるカメ類の中では最大の種であり、日本の沿岸域でも北海道から南西諸島まで広く出現することが報告されている（亀崎，1998）。本種は産卵や孵化幼体の時期を除いて一生を外洋で過ごし、甲羅が皮膚で覆われている点で他の海亀種と異なる（畑瀬，2005）。

本種は産卵場所となる砂浜の開発、卵の乱獲および漁網での混獲等により個体数が著しく減少していることから、国際自然保護連合（International Union for Conservation of Nature）が作成する「絶滅のおそれのある種のレッドリスト（The IUCN Red List of Threatened Species）」において、絶滅危惧Ⅱ類（Vulnerable：絶滅の危険が増大している種）に指定されているとともに、「絶滅のおそれのある野生動植物種の国際取引に関する条約（CITES：通称ワシントン条約）」の附属書Ⅰ類に記載されており、商取引をはじめとした輸出入が世界的に規制されている。

本種における日本での目撃例として、死亡漂着した個体がNishimura（1964）や亀崎（1998）

にまとめられているが、その大きさを記録した報告は極めて少ない。

今回、氷見市の泉川河口でオサガメの死亡個体が確認されたので報告する。また、ひみラボ水族館で保管しているオサガメの標本（剥製）についても報告する。

調査結果

Ⅰ 漂着個体

1 発見状況

2016年12月8日、氷見市島尾泉川河口にてウミガメの死亡個体が地元住民により発見された。同日氷見市環境課により確認され、筆者らが現地調査を行った。

2 種同定および計測値

死亡個体は頭部および四肢が欠損しており、腐敗が進行している状況であった（図1）。背面を確認したところ、オサガメ特有のキール（筋状の盛り上がり）が確認できたことから、当該個体をオサガメと同定した（図2）。当該個体は前部欠損背甲長120cm、腹甲長96cmおよび腹甲幅84cmであった。なお、雌雄については特定できなかった。



図1 発見されたオサガメの死亡個体



図3 ひみラボ水族館所蔵のオサガメ標本



図2 オサガメと同一したキール部分

II ひみラボ水族館所蔵の剥製

1 取得経緯

2012年3月の富山県立有磯高等学校閉校に伴い、漁業関係の資料と共に同校で保管収蔵されていたオサガメ標本1点(図3)が、翌2013年2月にひみラボ水族館へ移管された。オサガメの標本には、「オサガメ(長亀)製作年月日 32.11.20」および「標本は昭和32年11月上旬氷見市中波灘浦漁業組合所属の定置網にて捕獲されたものである」等と記した解説プレートが貼付されていた。

2 計測値

石原ほか(2006)のオサガメの解剖報告を参考に、メジャーを用いて、標準曲甲長および最大曲甲幅を計測した。なお、体重は当該個体が標本であることから除外した。当該個体は最大曲甲幅108cmおよび最大曲甲幅78cmであった。なお、雌雄については特定できなかった。

考察

オサガメの日本近海での捕獲および漂着の記録については、北海道、新潟県および岩手県で多く確認されており(Nishimura, 1964)、特に佐渡を含む新潟県沿岸の1922年から1990年において、56例のオサガメが記録(漂着、定置網および刺網等)されている(本間, 1990)。

一方、富山湾におけるオサガメの正式な記録はほとんどなく、山下(1995)は、富山県沿岸から4例を報告しており、石川県側の富山湾では10例が記録されている(松村, 1996)。さらに、富山県内における具体的な確認場所については、1932年に神通川河口(坂下, 1955)および1992年に富山市四方沖(南部, 1993)の報告に限定される。Nishimura(1964)によると、1614年から1963年の調査において、富山県沿岸におけるオサガメの報告は1個体のみとなっており、前述の富山湾で確認されたオサガメ(坂下, 1955; 山下, 1995)がNishimura(1964)のデータであるかについては不明である。本報告の泉川で確認された死亡個体およびひみラボ水族館所蔵のオサガメの剥製は、データが明らかで県内で唯一実物が残る貴重なものである。これらのことから、データを蓄積し、記録に留めておくことは非常に重要であると思われる。

オサガメの標本に貼付されていたプレートの情報により、標本のオサガメは、1957年11月上旬、石川県との県境に近い氷見市中波の沖合に敷設された定置網で混獲されたもので、捕獲された後す

ぐさま標本に仕立てられたものと推察される。なお、昭和30年代頃までの氷見の定置網は、三季の漁期ごとに網を入れ替えて操業されていた。11月上旬という時季からすると、オサガメが捕獲されたのは、毎年10月15日以降に敷設の作業が行われ、11月初旬から網取りが開始される秋網（鰯網）によるものとみられる。湾内に回遊してくる魚群を漁獲する定置網漁では、イワシやブリ、マグロなどに混じって時折クジラ類などが混獲されることがあり、江戸時代より食用にされてきた。だが、この標本のようにオサガメが混獲されることは珍しく、そのため標本として有磯高等学校で保管されるようになったものと考えられる（氷見市立博物館, 2013）。

Nishimura (1964) は、日本におけるオサガメの記録を収集し、その記録が冬季の日本海沿岸に集中していることに注目し、夏季に日本海に進入した個体が冬季の水温低下で凍死または衰弱し、日本海沿岸に打ちあがるという説を提唱している。また、太平洋のオサガメの産卵場であるマレーシア、ニューギニアおよびインドネシアにおいて産卵期は5月から9月であり（亀崎, 1998）、これまで日本国内における本種の産卵は、2002年に奄美大島で確認された1例のみであるが、その事例も偶発的な産卵であると考えられている（Kamezaki et al. 2002）。さらに、これまでウミガメ類において、成熟サイズに性的二形があるとの報告はなく、成熟サイズに性差はないものと考えられており（石原ほか, 2006）、太平洋のオサガメの成熟サイズは、曲甲長で平均144.5cm（Zug and Parham, 1996）とされ、コスタリカでは平均曲甲長144.4 cm（Reina et al. 2002）、フランス領ギアナでは平均曲甲長154.6 cm（Girondot and Fretey, 1996）の雌が産卵のために上陸することが知られている。本報告におけるオサガメは、いずれも雌雄が不明であったものの、11月および12月の冬季に捕獲され、成熟サイズには達していなかった。これらのことから両個体は、産卵を目的とし富山湾に進入したのではなく、回遊中に何らかの理由で漂着したものであると考えられる。なお、氷見市中波沖の定置網で

捕獲されたオサガメは標本として「ひみラボ水族館」に常時展示されており、触れることも可能である。オサガメの実物を観察したい方は、是非とも「ひみラボ水族館」を訪れてほしい。

謝辞

本調査にあたり、漂着個体の情報をいただいた氷見市環境課ならびに標本の運搬や修復に協力いただいた氷見市教育委員会生涯学習・スポーツ課（当時）の石田聡子氏、中武亮介氏、杉野尚行氏に厚く御礼を申し上げます。

引用文献

- Girondot, M. and Fretey, J. 1996. Leatherback turtles, *Dermochelys coriacea*, nesting in French Guiana, 1978-1995. *Chelonian Conservation and Biology*. 2:204-208.
- 畑瀬英男. 2005. ウミガメ類の回遊生態. 「海の生物資源 生命は海でどう変動しているか」. 20-36. 東海大学出版会, 秦野.
- 氷見市立博物館. 2013. 氷見を訪れた動物たち. pp.60. 特別展 人びとのいとなみと動物たち—生活・文化・信仰—. 氷見市立博物館, 氷見.
- 本間義治. 1990. 新潟・佐渡沿岸における大型海産動物の漂着記録再調. 新潟大学理学部附属佐渡臨海実験所特別報告. 39pp.
- 石原孝・亀崎直樹・日下部要. 2006. 高知県室戸沖で捕獲されたオサガメ (*Dermochelys coriacea*) の解剖報告. 爬虫両棲類学会報. 2006: 114-116.
- 亀崎直樹. 1998. オサガメ. 日本の希少な野生水生生物に関するデータブック (水産庁編). 244-245.
- Kamezaki N., Oki K., Mizuno K., Toji T. and Doi O. 2002. First nesting record of the leatherback turtle, *Dermochelys coriacea*, in Japan. *Current Herpetology*. 21: 95-97.
- 松村初男. 1996. 爬虫類(2)ウミガメ類. 石川県の自然環境シリーズ. 石川県の両生・爬虫類. pp61-72. 石川県.
- 南部久男. 1993. 富山湾四方沖からのオサガメの

- 記録. 富山市科学文化センター研究報告. 16 : 101.
- Nishimura, S. 1964. Consideration on the migration of the leatherback turtle in the Japanese and adjacent waters. Publications of the Seto Marine Biological Laboratory 12: 61-73.
- Reina, R.D., Mayor, P.A., Spotila, J.R., Piedra, R. and Paladino, F.V. 2002. Nesting ecology of the leatherback turtle, *Dermochelys coriacea*, at Parque Nacional Marino Las Baulas, Costa Rica: 1988-1989 to 1999-2000. Copeia. 2002: 653-664.
- 坂下栄作. 1955. 富山県動物目録. 192pp. 自費出版.
- 山下郁. 1995. 日本海におけるウミガメ類の来遊について. 富山県教育学部地理学教室年報. 3 : 155-173.
- Zug, G.R. and Parham, J.F. 1996. Age and growth in leatherback turtles, *Dermochelys coriacea* (Testudines: Dermochelyidae): a skeletochronological analysis. Chelonian Conservation and Biology. 2:244-249.